峨山入道 さわらい

四十六

和書門
類
號 二〇六三〇
函 五九
架 五
冊 五五

内閣文庫
和書
類
號 二〇六三〇
冊 五五
架 五
函 二〇三

内閣文庫		
番號	和 20630	
冊數	55	(49)
函號	203	25

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
© Kodak, 2007 TM: Kodak
C Y M
COLORchecker
x-rite

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

早蕨 年立ニハ廿三歳 花鳥ニハ廿一歳 如此相違之

廿四歳。 中納言

正月自阿闍梨方送土筆於中君方事

源中納言参兵部卿宮語折梅花献給事

匂宮宇治中君渡京事

二月一日比中君可移二条院給事

除服間事

林氏蔵書
日本政府図書
浅草文庫

源中納言奉御前等
人々事
前日中納言君渡宮給向中
君事
女弁尼物語事
尼出家事
中君与弁尼物語給惜名残給事
後徒日事
二月七日也出纏
左一日ころといふ也　藤裏葉巻下同し

詞云七月ハ月のさやかにさしいて
なれとこそ
次余日中納言可渡三条宮給事
夕霧六君御裳着事
可渡兵部卿宮給事延引事
源中納言望二条院梅集中宮御
方給事
兵部卿宮出逢給事

早蕨　花ノ歌并詞為巻名

秘但哥ニハ早蕨トアリ詞ニハ蕨ハカリ

アリ　花同

河

この春はたれにかみせんなき人乃

かたみにつめる峯乃さわらひ

私詞ニハわらひつくしをかしきこ

にいれて文かきたりし哥君にとて

あまたの春をはみつまへつねを忘ぬ

はつわらひ也とあり

今案英公加本

花
薫廿一歳の春の事なり
私年ふ相違アリ
私
薫廿四歳角総の次年の春也
弄
薫廿四歳ぞ匂へしあけまきの次年
の春也
箋
薫廿四歳也

藪しわかねハ春乃ひかりをみ給ふに
つけても
河古
日の光やぶしわかねハいそ乃かみ
ふりにし里に花もさきけり
秘
河有同弄 中君乃心のうち也
春ハ去年の光あり去年姉君に
別し時節乃さびしきよりも
さらに春ハかはらさりけり
藪しわかれたるやぶしハ林藪しけく

いやしき本ありいひなしいせりこれ
を宇治の異称云也
姫君らせ給て後年の意なり
なり

いそてかくありつる月比

義
大君乃別て中君のこころ之
私無別八ヶ月ありとて給ひしを
姫君さりの後んおもてありお後
今はみしありいそんや今まてそ也

いとかりあるへし
ちられさ事をともなきまゝの也りて

紀
神楽譜なきまに拍子ありて奇なるにより
むかり上句下句のいひかけたる事
なり

奇
奇の事なるへし上句のいひ出し
給へるを下句のつき下句より上句の
流さなるにたくひあり元貫之紀
ひし事なり又何事ゆへといひ

箋
おほせのつゝみかり
斎此上は御神態也
神事此未御也　同作法也
ひきとゆきとうくれとく
秘
又いもあいせん人もなにしも也
宮乃おはしますほとりなりかはしきよ
つまとも
貞
八宮也
私八宮よりも大君御こゝろふん限り

少し也
世にこまかへにほとく
秘
世間乃こと常なりおもひなく
思ひしもんになに又大君ハわしむ
みもうひなしとも也
箋
生死のかゝり有御事とも大君御こと
こふん之
こしおし御かりてハ何事か
秘
文乃大施詞之

箋 宇治山乃阿闍梨の文之
今ハむかしニ成れる事
箋 八宮大君れれなと世ねれハ之
わらひつくつくしおかしきこよ入て
河 蕨 毛詩 薇 鼈 日註 土筆ツクヽシ
本草疏云 周秦曰蕨 斉魯
曰鼈 俗云其初生似鼈脚故名之云々
薇ハ各別物也 国豆也といへり 紀多
和国通用也

わらはべのくやうして
箋 佛法僧の物を献ずるを供養と云
とらふ之
はつを
似合ずる詞を用べし 字可勘
てはいとあしうて
秘 手跡也
ひきはなちてぞ
弄 文字をもはなちてかきたる儀之

抄　大略よろしき歌と聞ゆ哥さまそのことは
浅みせたる詞かさなりたる所なりけり
此様は哥の心さかしく哥なり也
かゝりたるをかしけれは法師の歌は
ねとしゆる　義

宇治山阿闍梨
君にとてあまたの年をつみしかは
老ぬるをたにいとはさりけり也

花　後拾遺集
こゝろにもあらてうき世になからへは
恋しかるへき夜半の月かな　三条院御製

抄　故八宮の御時乃義例なとまいらする所
ゆゑ也
哥　心まさる此哥の心也
義は此の所を達せぬは時節を達ぬ也
大事とよひ侍りて
抄　中宮九人之
阿闍梨此哥は一大事なりといひておそ
あるしめひ法なめるなり也
義　大事とよみはべらんと思ふよりなり

感の出る所也
なまめかしさもおもはぬなかり
かし
秘
白宮乃御文よりといふとかす所
しる也　箋
くりまうさせなる
箋
おほせられ也
西中宮
これまてハ誰かりか見せんなと人のうらみよ
はかなきねのさこえひ

秘
は寄巻の名なり八丈大君かとも
ましほさ○そ我身うらみかし
みるかはかり也
河
箋
河を河海
見ぬ人もゆきて恋ぬへしと書札乃
うらみにはなれわかれぬなり
私
形見なり箋によせなり
いはけなりにあかひあかれ
秘
中君北さ海之　箋

さ波くれ清物わらひ
秘 大君の事自文これのゑへしなる御事
なるとし也 箋
もしくハにても給はしたつり
秘 おりゆや世話へ承様よ大君として御也
御おは女房ともは見て御ふん之
箋 弄
なかひ給へりしおりハうちとけて
秘 人の名前はさ候をくもあり

かゝはさにさうらへく
秘 あまた御兄の者より出るものから
まてこそありし事也
みえて御はからひのよ御とくせ
箋 此中君を葵乃兄頭し給はぬ人
かゝる人物語也へて此左大臣乃
うゆく思ひて御物也 又今ハ大君
かりそく似たれしとうち申くりう
まな女にのとこそひのよ葵乃御方

なりきやうとも
られ侍あまりの人にかよひなる
秘　薫は似たりも
弄　薫の事御使人にさるも
あさしきものしもいふれ
秘　薫は大君にこひあかす事之
いやめになりあそれ
孟　薫の愁傷に似たるなげき也
なにうちはけのんあきてたりハ

孟　大君は事なき薫は深切りし之事
を今いはんく中君乃物をかきり
めつらし也
宮ハあきらかに海も事也
秘　白き文なり
あいえんなき也抱さはかしたく候るらし
て　内宴
弄　正月はあり作文あそひなり
秘　大略正月中にある事也　親王

公卿以下にして作文などは常の事
也名のりを後らるゝ事之 箋
くまある事なり
葉太君の事なれかくされたる人の別なり
なれとも也
奇
みかれわれいとえんは
くはなれ句はあるき
わりあれう
箋
白文れんも也

白宮
さる人のかよふ花宴やありしと
いてれ下にみかへ為
秘
白文の奇也又文字は葉為いて実
はははくり為へ也守治りかよえ
為み事今に後る為い中君れ事
のうしうりきとも也 奇
箋
是そ白梅の事といへり又文く
くおぬしとい未完乃花のゑともいへり奇
乃第い母物に同し

色葉
なん御人よりいとよせられされの名をしてなし
てよみ哥あまたいりけれ
花
大かたりとくに白露と今よりまて
ゐしてしれしみたへかり事なれ
しと葉ひさしからへは中君乃事御さひ
うとせくみ御也
秘
かさしとはうこはけ之んゆはせてたま
つれ事いつ見けれし也
異
かしといふこはけくの後へはゐはう

りしんしくし花おほくへかり事なれ
とも也
義
是ハ中君乃事后のくらゐく
いそり心（かりて）としさそとハ梅そりけ
ていそりみなへしといふ葉の我身乃
事ある御へしといふ御人（たえ）のうはかよふ
と白札よみかつきそも也
いとけ流あそひ
義
葉白をとらえ之
新為子地丸

ゆしてさはりなかりしかり
秘
葉さへゆゑとも之ゆゑして句をなかく
しきゆゑんなる道けれ也　箋
新
葉は実人さへなきことわりをも
人のゆゑ人にてさる人
花たゞ
ころうつりにける世中色につけれは
人の心の人のゆゑしうらん
箋
まことけふそあるゝれきりなれ
みな人の心うつり此きぬの京氣と文て

ありみなけるなしもことに今は服なか
の秋をさへよりくあられなれ
をけむなとといへり
箋
ゆゑしきかめたく
人宅のさゆ之
あなたなるへからもさる之はしきみれあなかれ
ことしくしれ
河たゞ
表は秋の花みえてあやかなし　梅花
なしてみしねらやまとうたゆ

秘 ば二人乃句ひとつくり又ちりあそく
事倚くとよまり
箋 け方春氏よの風みいし
私竹乃きしみれからたく句葉
の事紙風みきあやなたれとく
しきやむ句ひ乃治路りてか
けれおとし給し
よにあらしありかきりまる中乃むる
ひ給

秘 葉大君り実事なれよし給かさ
かるなる也
箋 大君也葉との間の事と句
のとひかる之
いて何りとも何のといあしかきもんと
弄 葉しあ君し実事なれ事まで
あ碓しやうい色路に猫かう
又飛り心しくあへきらひ路に
なりき 箋

かゝりあひきけよ
秘　句は清んむかしひ之
さりれうもめのにんえなひく
秘　類なかし又頼りんえくあひし
らいなる之
あけりきんはうりも
秘　句之の意は心得とくわしはらり
ての哥也之
むよは云まあ多

箋　意の胸中は恭気乃静れぬと
なり
又しらは人ならく
秘　句之意中君は京へまかりけるよ
しの哥之　箋
いとう徒しき事あとはなれ
秘　意の悦ひなる之
あはなくとはうは何やらしとなん
拾　意の中君の事をおもくしなし

おもひしかとあね君乃こゝろにおもひし
ことしら也
葉此妹分せし事なれる也
大君と葉のあやまりたるよこゝろ
得し事也
あるぬ前此歌こと候
箋 大君の事なるを
としひ歌しや気しめさる人こと
秘 白文にはうひあそてりし也 箋

かのこと人しとかこひとなれるゆゑ
秘 大君のゆかり得し事也 箋
いもせ乃とわ乃よそこゝろり先んゆる
つもり
河奥入 伊行尺
こひしくはきてもみよかし人ほてに
いもせ乃杜乃よそこゝろとも
神なひ此いもせ乃とり乃よぬこゝろ
いさくれ鳴りわたるまさる 鏡妻
葉しけ女前行今此んかり吹さかれ

葉ハ大将なり姉君ハ中君をはゝ
花しまきを兵部卿宮なりか
をりを見れハもと思ひし寄合
事侍のようをりやしいふなり
こよし此事あると見ゆるなれ

紅可勢　竹河

花

いろせの杜此ふみこゝ花の事とと
竹河の古哥を侍しもとも哉
とりくゝいはしくいとくゝもみ

よしの哥大かたハとて遊ならふみや
人とてとりいろせの妻此ふみこ鳥
もと人は〳〵なつ無りやしいろ也
又いろせの杜のいろ〳〵の杜と見へ
源氏の一ふ中あつまとこゝし

哥

中君よりは竹の一乗たてり紅
ひし事ありさりの此事そよ人

松

つき
忘しくいさてもみよかし此哥

さはかり人はなしてあらむ
事也こゝに一禅らかこもりゐつる
つゝしむ也これらも人はなくなしてと
いふな也
云しくいさてとみようし人はくに
し人はくかりてあひみし事
乃ありしも也さ程へ色すてそさ
後にとりつたとされをいひの
よしのすしも也

花鳥箋可秘　箋

心紙らにいらくなめくさた、
秘　葉のゝ中彼様也

箋　くやしき事をうくまかりゆけれ
色は深毎乃事紙うた生色た下
地也

あまりたんもとふそいてくれ

箋　かやうに葉乃用意をはするゝ人白文
此云君へかうひかむく中宮云へ也

もしあやしき此薫とやらくかくれ
らひし事ありしをそれありまさ
て中君乃浮舟をとひいでける合
せられし之

さてとれりし浮さんにつけくと

秘
薫此やりとり給はくは非り
かやしも

系
二条院へ中君此あそり給ふ事
かくしこめとよろしわかうど

秘
宇治之事也
二乃みこをあやしきこてんと
花
かくし（いさこうに）給ひ此世は亀あんきさつかや
仏見乃さやものあれませともたし
今業宇治のあるまい給ふさん
事給いえんやくし給ふも
かくり　此花
異
いさよいにのまい心まさ
我世にもつとしくあまん事給

ふりさかえみし人御かほもうちゑまり
哥よみかはしけり里乃なかりしいかて
けれ

総角

中君は匂之いささかにたかひ世をすて
匂宮んしの心ゆくかたりこの
侍にゆくこうに依て行つかひ中也
匂宮くおもはせ給ふも姉君のなかと
いきあんしと宇治中君の山里に
ふたりくくあかりたらも御見給

蕨

宇治より二條へうつりまへこ
とりの御見乃里に君ゆかしれはかな
き御話勝之
門前いさこうに新世はしこれと
薫中君めしたも新世は匂宮んをし
下りすまして給之
私八宮のかりしく此山里給
あくられ御方をもの御わかれ事
薫かうみそめり

河

伏見在大和国　日本紀云安康天

皇崩菅原伏見野中陵葬

すかはらや伏見の里此あれまくより

うちひしくの後ハ有しふた

あれしきてんせしいそんなかにこの

かうらせいつ所の宇治のかうみ也

いかなるそあらさる所也

此伏見ハ大和国よりすかはらの伏見と

いふ所也うしこ此他人のよ然所也

あれをまみ寄にて菅原院をとふ

みさとゝいふ也

抄

さりとてしとみせぬくんいまゝく

中君此んあそれ也　箋

箋

奇もろ所しく

うし所さらくの仕よう所まし一身

ん也

あさうぬ中乃鶯と仕之はくえ

さゝ

秘
かく色くつゝくは白乃かよひ路よ
事もなくよのみありぬべし
事訳の所之
白乃中君狭くも所之
いくさへかんや
中君也とひより所也
さ浅くれ乃浅くさちりつる
箋
二月也さしめ也之
花乃本しまれまうしたさむも

秘
庭の術也　浅ありさ所術也
みよひの露のすみをすてんとしきの
うしとこ世にしらにあらぬ
春霞る川をみやすてくりりて
花かす花里にたちみやかしく家
きのうやこよしとい御届うりよ話く
いくる家之
常世（トコヨ）　日本紀　蓬莱山（トコヨ）ニ同
花
きのうやこよしは波磨巻ありと

見しありさまの事なる也
優婆塞か乃昔ハ京のやむことなき
しなをいふ之
弄
喜撰か川なるの宿なくきけるを
宇治山里ありし人の世をうしなれ
妙之
抄
喜撰か川にて詠みすてゝいほりのあ
みやこのたつみ悪留我身は庵々
にしくいほりありて喜撰也

義
あつかひ給へて宇治の山里にすく
乃事なし出て見るに此寺にして喜撰
かくしける
今見るさ所不ひと中君乃故郷
あらぬ事ありけり喜撰のかはを
見すてゝ人隠ぐ庵は我かたゝ中宮
なつさ花の木ともとうとく嵐ぶ
霞の川なみすてゝんなのしれと
しらくうちなき

秘 しところハ前にとをり濁て読よ
みかゝり中君まて御めくませ給
さし人なと御覧しとゝめしよりの事
なを頼く何ゝ思所侍りなん
なき也 弄
しろ川よ濁ゝ痛しく
山里より始めて御使出なのしく人
れうしは御なと也あるまくいまの
中君の心さし思ひかく恐怖し

あらぬ也
濁てもなりりあるしとあれとも
河 くもりあれハ京にぬきすてゝ河原衣
花 なてあれ御ハなすらくあらり
あ御の服ハ三ケ月也
秘 大君十一月なりう世なつり九十日の服
あれハ二月よぬきなつり 義
弄 濁衣あつるり 見河海
みそれもあさかれ

河
除服事之
河原へ出て解除する也これは
忌の明て服三月之限あれは事
かねてぬきすてゝのこんなり
是又母の服はとゝに着せらるゝ也
此之はてしあり引かへられ
除と云也
花
みりたしもあさからぬは軽服のまゝ
いまはいつまて除服の時を河原に

てこしへをとゝ除服あり川のあさた
まよせていてり
秘
中君のん也　あつきて二はしき之義
弄
あさくとも子たに似たるかとし之
おやひとつは
秘
母一つはあにはいさ除事之娘兄は母
此こと〳〵かはりの事之
箋
母とかはあにはりてきさしき人之
中宮の誕生の時母小方はら方

はへり

笄
こゝへ行人もなかりしときかれて
くさりあまた皮袋にかきつけて川を
衣の菁なと絹わ(ひれ)つくりけり
御車御せんの人て

秘
御役に御条ふりて紙りん用之

弄
ちり世あゆしとてまつ追はへり
喪服の役の衣也
女もちり世てさそ宗也

秘
女にもまつり此女々たちなすゆへとて
婚礼年あ河とも也愚案ちり世を
陰陽博士なと御へ祝へ御くへのる
先御前にへて陰陽師ゆゑく
まつ道と河へし

笄
たちれ事といへるは物也喪服なりせ
必陰陽師のあくてうあつく之
祓衣も用あり

蓋
ちり物しや衣の衣あらしまにて花の色

こくおりとさし給へり

秘

一説中君の事也といふ説は薫乃事にてあるへし今日は中君は以後のことはなりて大君の事なれは日ころよりもこゝろしよきなり中君乃除服なりとなりさ給ふこと也　箋

弄

薫事也　此義にて見は中君乃ことをとこゐる之

或説云中君事也　此事除服して常の衣かへ給ひとあるへし事乃さまかはりけんとみ給ひし花乃色とやかく給面白けにみて又中君乃心ならしけなき給へし霞の衣花乃ひとさしま此事なれる也

花

霞の衣は服の事にまかく人なり花乃ひもとくも除服のこと也

京に多くいとこさなうにゝく
秘　けゐとハ奇なるけしき事の地の
うけ給也
ゆきかへりけれともうはせぬ
秘　京へ出る人つたの杯也京にて人と
みちのくより人つたへ之事
たりおつけてかへすを京をかなすれ
秘　業此物んよまんとこひの事
始る人をも此さま絵にはかくれかなはね

んと志めて
奇　実そ治もにんよわり
秘　我か心とある世の事ありけり
わかれ人とは
始めにんかよすゝ事之
ゐらりくはまうり給ん事を使也
てれ
秘　業守俗人よりの事て二月
六日之中君に七日より京へまき

うとなつりいと深こひけりわすうちなく
なる如し
まらうとなれくゝに
秘 客亭之
いまは庭かく於かな絶て
秘 大君おもはせりしも
我こそ人よりさきにふ
秘 大君御ま川東へ渡さへしと也
こひし於もこと

けちそうにうけたまはれ
秘 あはれり大庭かりせしゆへ
おもゆるも也
私は此宅中君此事御我記にて
とおもんあそとをふ薫此なれ
うまゆゑせし志やし此事なると
秘 椎かもとにありし事也
これ中をえおもふこゝにて
義 人のなれ故よう私深りしう爾也

うらにたく

秘 大君の事をたとへいふ所也

うらひうみなけり

箋 為純三位通家とゝ云之

中君は浮してもかさなる涙の川に

おもひわたるともおなし流也

河 わたりかさねて涙は河なりとおもふのを

なかりける羽の前後ニ比翼之也

秘 河なりとて世をいとへり京へ出なん

比事之哥

花 京へいてむなかれ人事あはれとも也

事也

箋 中君の涙之涙は川名所也見えたり

あはれ乃わたり川瀬を見えたり

花 妙之

月も猶なかれたりとも

秘 薫人流ても身の数之類之

いとふあまぬ世乃からも

秘 かねしきなみたとも也
私大君のおもへし涙すこしの涙と
うつりをゆかん事ありけり
そしるなりし也さりかたく涙こほるらん
ともと

弄 中君の詞
秘 中君の思事也さりけりしておつとに
さてされともなき也 箋
いか心にてはうしけふ

秘 箋 薫のさ涙之
薫はさ涙と中君は之
きゝをやはおもひけさうしぬ人乃事
あさん人

河 故姉君の事也
弄 あね君乃事ならさるに薫ふかく衣
にかく給也

秘 大君はまし涙さへあつかひ給人
さかなとも薫給ふもなからさえひ

出なるなり之

はきせぬ御はらのかへりあはとも

弄
あの君此かた之

箋
薫のことはこ氏へしやうかゝる也

中君此句ハ源よりかり乃おほする也

薫の用意也

わりなきせなりけれは下よりくゝ此比も立しく

うけるひ給へ此違候

秘
句文ハ二条院へ中君移り給へるを

ゆかしき也三条乃宮なるを薫のもとへ御

見えたる也　移ちかう給へしと也　箋

中君此ほとより移ちかう見え下ハ二条院

也薫ハ三条宮ほとちかく出てわするゝ

なりとも見え移ちかり　移ちかう御見え

事なり之

弄
二条院と薫の三条此宮ほとりて移

りん時ふかてちかう御へし

はなくしき人乃いひ給ふ

花
もの思ひしたらかハ来申嘆かしと
いふにいひなかれ事也
弄
来申嘆きし給しかれ人くいふな
事なや
箋
世上ナリ無聊ナリいひなれ事を
儀ナリくいひなりせ給也
秘
清きくし世儀ナリいふ事也
添く也
私
つきつぎの添くもつらし花義之

人のんさ添くふ待る世なれて
秘
申覆の清んそいつしも也
箋
我人みは随ふしと於ふ事跡を
もうひの人乃さかとにうけぬるを
乃本除をとりくり
風と云ふ絶し也地の上にて
河左棠年
今そし除くれしき拙しと人まさん
風とさふれさ下入りけり
はかなり宿伝しの絶し也いふ

なをある故に文詞にもよるへしと

花

中務集花の香氏つまは道理も

ことに宿かれにし君はそとよ

弄

中君詞或本里をかも也心同字はさ

くれまてころんとしてよみ給ふちゝなるや

秘

の詞は各給さりし也ト之

りかいつれしかけ然一まては宿は

く我は付に可色紅也とよみたまふと

くの詞よみなし也文の事て意なれ

前の詞給うけくいりくまて給

つゝてはなれとやかよりほへ紀あと

ひつく字也の詞は私も答きて字給

んらすりに也此年て給也

本はしき也ありけりありきと

義

但哥に及ぶ詞也中君詞之は字

給の思は出悔し詞也とよみ給

葉乃出来の事は定也給ふまと

也

私秘の始ノ義并箋の義を可被
前々はよみ給ふさん事御座
あまたある事を存候得共
いひ宿御座候事しかも皆は
山里は冬ぞ一つの意也
ことに深くいひきかせて　箋　中君は葉を入也
よの聞ゆる也
いとあはれに深くのみ人多かり
秘　大君は女性の御事也　箋

いとくるしく
　薫は心中之
それよりのことわけてもいはれ
箋　大君の方へひかれ中君とちかひ
契りしけふの事也薫は心中難
意也
うらみすくなかるへくそけれは
夕にせいに字ありし心付てう
あり

春や昔の心しらぬ海とはいふ也
なれ
河（伊勢物語）
月やあらぬ春や昔の春ならぬ我
身ひとつはもとの身にして
弄
此歌業平の二条后の事を思ひ出しに
よまれたり
抄
同歌の詞ハうらみたれはかり也て
思ひ出し也下の心ハ二条后の業平の
昔ありつるぬ心なき事思ひし

ありし在五か心も業平も同かれつゝし
心にし也　箋
箋
心深き也はつかしきもとより大君
なとよみしか中君も業平も同し事
也
思ふ花なとに昔を思ひ出し給ふ涙さし
なり
河古
さ月まつ花橘の香をかけは昔
の人の袖の香そする

秘
はまとゐは譌也　哥

箋
月日さ月まれし
はまとゐの席にてはつかしき

秘
大君の此花をとてあそひ給ひし
物師説也之

哥
とてあそひの列し　物語也婦君
の事をいひ出しつゝ又今さうけ
まん事をいへり
かの人もありしにゆかしく山さとにむかし

おもゆかし花乃香をたつぬる

哥
中君事也とりあつかひ出されん
とかりし又姉君乃たつね事にとゆる

秘
は前顕て給へ　此上哥
大君此事は昔にあはれ深けり
はけしく入といひ出されし也一条中君
乃此山里にうつれんと也もあれなき

哥用之

箋
是ハ大君此事をいへり　みなし人と

あらしもかりそめ也
私みれ人もゆるしに源よりも此ハ中
君乃京人ニよりかゝりけんとうた
多りやうたゆかいて哥也花乃
あ花かし梅花句ひより一入大君花
事ゆゑよしすれへし
かへりきたえへし
秘
薫花きんてうち之又薫花あ人あは
しらぬけくいつれぬへし

雅よまつし梅ハ乃ちぬまりひにちく　孫家兜
う流縁よ尾とやこそれ家
河嫁撰
恒よにちりて防花縁之可かりそ
孫こちに風乃ふきもこそれん
中先歌婦君のうちみ也よ先之孫也
雅よまつしく葉乃一秋花んとも家
弄
りやけんは花りてし似合すれ也之
孫こ此んハ根家かし也中君乃京人いう
流り歌ひん事也本御根家かしう

秘
浮と争之
中君は昔のさまみしとていひしにあはれ
あはれりと今都へ出ぬるをなほ
根なかしは川しまれるとてこしも也
根こめし
箋
中君も争論なり　根こそぬ根
なかりし也　白人定りてる絵ニ也
私薫も一来乃争をらにあはすると
ともみしあり

もとぬなみさほさ侍よく
秘
薫のさ侍之
あやしれはくもあらん
箋
薫のさ侍之
これはもとよりにひきうもれさの井人
箋
宇治之父の為ちちる井人
なしも也
みさりともなかとに
箋
是は薫の須知宇治の辺過之

かくれもなくけふは
秘 弄乃尼丈螢紋なとはしはなくは
也 弄 箋
弄 一説さけ花としても
志るくもしいてく
秘 薫此めし出しめすえ
いとあはれと見るも 箋 薫の也え
相木 八宮大君乃ことみえ
うらみはたゆとはしく

秘 薫乃詞
いともめでたく
箋 薫乃ゆくころ人あんせんあり得あれ
ましきなりも也
いとなさけなくのみ侍る人事に
河 みつきのき薗田乃池に猶女なほの
いとなさけなくわれ物なそえ守は
孟 あやしくもいとなつかしくれんの那
いたしてたれおとかはしうたゐつた

ゆけひの命婦はおりにあはれなりけり也

箋 不及ゆけひ

うへすてさせたまはん

抄 大君は帝のまへすてたてまつる也 箋

あはれの世のなかをしろしめす 川せ

たり

河拾 大君は女御のひとつ方に心かはらず

あはれの世のなかをうらみ給ふ 箋

はゝもいかにおもほしけんと

抄 雲のうへも涙にくるゝ秋の月

たりや

いかですむらんあさちふのやと

蓬はあつまりし也

こゝいかほとさ漫ろられなに

抄 さはれはまさ漫いらはりたる也

箋 さびしさにたへたるやあはれ

よしくさはさいなかり

河 閑靡（ミヤヒカ） 文窈窕（ヨウテウトミヤヒカナリ） 文選 文閑（ミヤヒカ） 白氏文集

文 䁥䁴(ウツトウ / ミヤビヤカナリ) 遊仙窟

なりひらもしくはなやかなる

秘 大君は宮つくしくなとひ給ひけるを

てさ候くの筆をとりのあそうは

ちり給もしくさるなをあけゝしく

もの筆をとるむ色に物給ひとる

出かよ

秘 けふむけふとるかげけむれ

弁ともさ候之

さたりもの候此川にあ給あけも人は

とられないのちあ候

花 何此ふうの候此みちにさそゝれく

うたり此そとひにそうもとうれ

弄 あの君乃筆給とこり

秘 人すわくまぬとい此候あゝは大

算 まにとれ候すとも

あるうにさたもはあそ候川也され

不ノ所給あけそ大君りそくれも

さいはてありしてそ也面白奇之
うらのうみさかゆ
箋 うらみなれくるこゝろ波之ゆかなくとかは
あはれ
この縁もいとつまめになかゆ
秘 ものゝ法文のうちなとして身縁なきくゝを絶
あなかし之
箋 菩薩戒也四十八軽戒ツ十重禁戒
しるへく十戒二十三のうちを五戒より

ても第一ハ殺生戒也我ゆゑ身縁な
けなかすれと殺生戒なるへきな
なれぬる也
かのきしにいたる事
花 波羅蜜ハ梵語也翻して到彼
岸といふ也
奇 此所よりしてこ之道し彼岸へいたるい
なれぬ事なきゆゑ法のみちも
定んと也

秘
入水なと始りてハ佛乃制戒アり
守りも侍至凡彼岸ありいさぎ事
らいかるへしと也
義
殺生戒を破りてハ彼岸よいたらん
事かたかるへしと也
私なれの所にとゝまりたる事なそ
さへゆるは我とおもふなけなとし
てこそ彼岸ありいふなるへし又
あるとへ彼岸ありいふる事のさ

一
はりなれハとも見ゆりたる底に
ちはみえてん事をしらうゝ色
こゝ事於ゝゝ到彼岸ゆ事なきさ
しなきくも思ひとたるへしとの
給ふ也
あへてもめしくとゝとゝへたまに
秘
諸事もめしりをとゝへたしも也弄
義
命ゆ長くしとも見ゝかくしともと
て罪障也あゝもめしりとゝあして

まれつた世をはかなむ也
愚意
所詮なさけん心の門より出門みなくもいたし
こゝろにまかせもせす
花拾
なからん門をこれとも門也なかくく
忘しき誠にかなはれとすき
寿 頌
安くしくの浮くも我思ふことの
事は物めくまれとに随なれ
秘
想し
人をはかく教化し給へとも我はかく

一 義
さ候らうたとも也
其論なるをもしも人乃性はならぬ所を
其は人の本意を施けはそむくと也
秘
あてかなたんとしゝ給ふ
無始無終也
寿
人乃とらもれ事やと
二乗ゆくゆくかくは句文をやうしり
秘
ひゆりんかてあゆしまり
句文の所をとゝのへし之 義

私云二条流にハ流りなかりとり家
の需色を意の宇治へおはした
れとも是れ文なれへし流也先く
たりし多う也とありおとくよりおく
ちしなるへし

秘
わとかし此女まひは多

箋
中君乃事かにて歌之
意此さま弁乃中君へ也
みれ人へとんゆうたみのさ波

箋
一 宇治よさらすう人へく也
いよし唐川して

秘
弁也 箋

弁尼
人ハいされハたも川か家神のうへにハとて
とうか代表へてあまの家

河海撰
かし家神し此う乃う川世見えれ
したゆりの色かん 回房

秘 新古
なう弁さ家おまれさそみるうに
神のうへにと川路れ 読人不知

弁君なりしへてあつかひ給なりみすれ給
ましにきこえしや
私袖浦 出羽国ニ 独蘆塩竃なりし
海人かたるへしとの字にてはなれて
そこなへられ

うしろへそこゆるも
中君へ弁尼のもとへ給ふへり人乃
いうたにもいりをうしてむしかしくたる
色つらし次

ゑ中君
身をなけむなみたのかはにしつみても
こひしき瀬々にわすれしもせて

河 後撰
人かうたくされかほかひきえぬへく
ひとりとなみたのまと…

哥
中君此哥之心とは弁尼か
袖にとなくさむる同し事也之う
こひしき瀬々とは弁文乃言へゆくを
うたかふるゆへ也心ハ…
我身よりの哥をよりまつり

秘
中君の事也ことゝ姫やといふことなり
ます也兄宮の御なりをたとへいふ也
うちとけたる姿也さらぬ人のなき
好む事也河海
んくもらぬ兄宮の私し此事よりも
此なり
箋
此君猶宮の此つまつまの姿也兄之
せりすみにたる事也
秘
中君争にの好む詞

箋
中君此詞句ゝ文乃心なれとひらたき
くまなきものまことにしてさまなこと哀人立よる事も
あれんかいもなりや宗治乃黒などの
御ことなりよりたてる也
くちなくもつらたてる人を
秘
兄なつかしいなり
よしらの人のとてはりひかれ
秘
大君之
箋
大君此詞度しらの様弁乃兄也

乃あしきかたの事也 〻
くへよりぬるく見えしりみ給へるをみ
まほにはかたの世と
私中君の初也
秘 大君後一條恋慕を添給へるさとを
おほはしめさゝれしも也
弄 弁ハ郷へきてものふたゝふ嫡君
の事を云之
河 はかたの世にいふなれ事を遊ふかん

むかし此世にても又波かりしかれ
ちゝ宮へ此こひかくあそひに
弄 子此母君ハうちかしこあるも也
見えかたりてひかし乃こゝるく
秘 婦除を添之
はし事しとよせて
秘 はしむ人なり
依薫此君の車もまへし
はしりからも
秘 匂宮之

いとゝなくおもほえ
寄
秋ともいひてしらともなき
身にこそ厳より
義
意氏庭りさみしひかりてらや
いかいふしかいふりなかんと
秘
中君のへ之 義
大輔の君とかゝ人のゝ子
中君乃官女之
大九 中将君
さよき八ゝれしきせにもあひぬる我ものぞ

宇治川よなけくはしらは
河 六帖三
いなり川くさをみてわきかへるせ川
うきしたせゝになるまあすかと
後撰 後仲
山かはこになかれかけりなかりん瀬川
うれしきせにもなかれあふやと
九条右大臣集
うれせにもありしかとおもひるおもく
うれしきちか川にとこひしれらなん
秘 六帖六
いかつとはしきそみこそまゝ路し　九条右大臣集
うれせにもありしき我ものに──右前

乃斎比んあり
斎
れつとはしめ比みてわされ比斎かんに
なるへし
箋
入水比事ふてハあれハらひを色かハ
ま於用なる挽り也ハ移たうを
きふ乃られしきせにハあはしと人尾守
てよ於陽也
雑乃尾比んをへ心よなり
秘
中君比んり弁尾のんをへりは今

たりなりせんあ仍て尺ハし給
色於也 箋
今人
ゑにしうさしき事をも尋すれ給こそそ
秘
つきをゆくころうれ
此斎そなくうりもたるを理也
将乞
斎
いまわむとりせし改車にのれ色尾女
房なるへし
箋
此今一人ハ推とも後みれ此斎まて改

しられ也さてこれハ六条大君母ハ
事にて只大君はかりかくす
秘也
いつ迄とかく思ふされんくかそらの
流くらさて
哥
此女房ともハ姉君かたにおかした
つらし人也いつしか中君此事
をりおもふ給へる事いみなかれ
哥也

秘
大君かりかよせし人〳〵今はらくな
らうたきかくこそ御さ御とはなり
哥
中君此かりし此人〳〵の事いみなき
まうけくりく流うたえなき也
みちのほゆきまれけうこえしき屋さし
こたり
秘
中君ハ此道御はなしやくるへ給
思ふるよ
哥
なさけしきらぬはずかれ面にし

後俎なれたるかはとも中君のみかゝ
りぬへりよしなれ之
はしたにのとへひあるまし
秘 句文乃意えしあれも今出とりまた
えりみつのすとも也 箋
七日比月のさやかに
箋 道すかくまてくらき也
中君 なかむれは山よりさ出てゆく月もよにすみ
わひて山にこそいれ

秘 わかありさ侍り月をそくはりたる給
いへり
箋 月ハ山より出ても住わひあまりにて
山へはいれるも也 我も今出れ
とそいへり 此句文字あやまりなく
宿ちける也 云々 此哥のはけ
つゝめし 云々 四所にしてなかむれ
んあるとも 云々
私中君乃山里住しかりにんかゝ

又まへハ此月も山風ふくこれ物
哀れなる世をすみうきものとて
しるべの山へ入らんとするに此
生をうけたる身を思ひあくかるゝ
心をとゞめてもあはれなる心
秘所をさとりてこそゝれ
こゝろ也

秘
さ夜ふかりてはかくいふならんと
我もし山里ハ川の事を云り哥

捨てまうし侍るゝたなりて哥の心を様々
事とやらん

秘
句々ありあはみ侍りしさなるを何の
事を云ひしなり

尋
うるなり中春の前へ出かへしく句
文の味を立ませはいふあるへし也
字治かくてきまきの所くは事を
昭和也もありて云ひし事ハ此此
数もあるなり也

それかくりのこゝろてよはきかれ中ゝゝり

河 この殿ともいへとゝみなりさたなく

それゝもよりてたり殿はゝるを

せり

箋 此二条院は後くまて也之桐壺也

更衣よりは源氏も上ずと人はゝるを

て又句文也源氏伝也

秘 源氏のこゝろにはうつくしき世語也

嫁娶の礼之

箋 句文也本嫁也礼也中君と文乃

源もすゑ先男ゑにゑ也

いろはかり也也此事ふるし

秘 婚てはいろ也此物語ゝゝとれ川きて事

此条かくゝ定りありいそり

句文乃ん婚也されりいはゝをゝ

此事にゝ中君終くしあるを

奇 も也それゝりもく定り源ゝ

人くいろ光りゝり

参
さし兆守治へたまはりし御申しし時
乃事をいひし也人々云子也之
今も明石中宮御つし乃御許容
也
おのかもゆく　河　所狭縁
本日あまり此ほどもありわざと給りん
しく
薫三条宮新造ありしく間
月女余日移徙まへりし也

これほどいひしに
并　三条宮移り出にける也
薫の事
其乃院ちりにほとなき給はせそいとあ
うんとて
二条院三条院給ひしし之　守治
こりわたりあへれさ海を薫此ゆ
りうそてよふく海まゝく　三条宮より
おもせししこと之

はんにいりてとてなし
箋 白氏の御意如乃神なと之
うらしれ地かうし
箋 意のかゆかや地う稍しきれ地かう梅
しれ之
とれにとうなやとゑし
河 こりくれ地にとうなや世中に参
あつれう此秘う歌やおもらん
秘 とりくれとのにとうなやおもおか

きも也 箋
弄 月哥
志なてはやまなのこ川うみやりまて舟乃
まおならねとも遊ひし地御やそいひ
うちはましれ
河 いひくらして 腐也
河万 志れてうやまなれのうこにさして舟乃
まはとりといつにおひそてしうか
此方大略同地也 然なとえ遂云一方参

とりゐるを強非非ひと或文伊勢
物語りをむかしをとこみなれや
うたふらく万葉哥あまたく海香
山乃哥以下也作物語あかしへ也飛
事當事也空蝉巻あり勘あらそ
中右海しを流收る寛白くにはみ
うみ乃浦さむくしと詠し給源氏る
左府なうて此穆務さくく頗ふと
よ海邊あり志而てあむし水海

乃熱名也にかて亂閑ん也白氏
文集ニり潮光ともあり此事
ヶ或いは文雜彼ニりうさ海塩にをと
しているとりつ也といふをてつれ
塩海之
异
万葉哥にをあしはりあり子
細見河海てあしとふんりしれて海
ゆくよゆ海にかみそ海ゆくなゆ所器
山乃志亂て海へゆめ海れ廻し

秘

この儀ハしほれてしれかりいふとく日
なるといふことに候之
万葉集詠するは河なと詠也河
海なとみしかり墓乃我身をかな
なる類也あひみし事まてあり
し湖詠也しほれてなしと湖
と云るはしほれてにて日本紀ニしほれ
て海やうら見也しほれ八別の
事なりとしらるゝやといふなん

とてしほれてよりやくとみするに河な
ゆくともよりとまぢ　万九しほれてこれやよ
かれ湖よし　河海ニ万葉詠ミと
つゝる湖也こゝに此詠とも集詠也
海なくはみえゆるわさ也ならぬ
集ニいふ湖のつくしほもまゆ云
又無類也　第又式子内親王万葉
をとるとまよりの海や鹿乃うらに
たく塩乃ありぬるも書乃字し

ミこの勝負　まかし女郎あり

箒

あれこそ薫也古寺殿未給ふなく
ほまさみるも形也古寺こそまほしも
いまに逢みてしかも也いふりから
多ハ実の事ハ家にてこしか也ともこひ
新きし給は家殿り海かなしね
也ともあひみし物語也いひくる女
しもかなかし也中君給人乃物かり
見あしく浮舟の心かしらくしきり

薫也とつれん也是三光院ノ説也
称名院同心ニて此秘奥ニ被仰たり
右也大殿ハ六の君ハ

箒

又書之六君のこひさしからしも也又も在
同物語也
之ひ北かりの人給
中君北の事也
あの(ほ)也よりは北か也たほしか
かり

案

六君の事よりもさう侍へりし中君
のれいよりもいとたゝしくいとやう
なるは夕霧腹立給ふなる也
そなれおかんすまて

匂宮は六条院にも住給へいり夕霧
中にも同し宮所乃同也今は中君
ましりうけゆへて二条院にて匂乃
たいの所をいつり
けふみそしつへく

秘
六君は人々匂は文あまる也　異本
はなきれと世にひゝきて

異
六君をとこえんに匂二宮へむ
人給ひん也夕霧は源氏の子
中君にもさされは之ひしも心は
ゆへもひとは給人給ひても人に給し
中也

案
六君気震事
ねかしゆりてかはましき給ひし

花　夕霧大臣也薫大将をもいへる中君の
よしみ也　箋
此中納言殿ハ人よりまさらんと
薫殿人のむこにりにしとなさんとてに
わざとし夕霧殿おぼし之をも白
家の源氏のさのみわかむらめやう
にけなう叔りくおほすなれ
箋
思し
中ら此人へしまぬ物にといひせん

箋　大君の事おぼし之
もしたらせ給へと
箋　夕霧の君此事へしく薫への
かくえ
箋　男もゆしりておほし中まても
薫乃心殺男もいひしくしれり
中也
此君さへおもわれしことをいふれなも
私意ありといひよりくわしくかの夕霧の

為子之　一

秘
此君ハ葉也おもひかへし清意にいれ

弄　事をとる也　弄　箋

葉の事也白文をうけあはれと

也　箋　言出(コトイヅル)

かくはかりまたにとのしぬへも

箋　葉ハさ海之心ぬる花人おもひなりかゝ文

音ハ見事かね絶ゆるもさきにしもえ

の給ひはしも也

花さそふ比ぬと

箋　三月ふ何へし

二条院の御かくれ後

弄　葉北み給ふ也

ぬしなき花庭にも見まけ世の風にまれ給へ

んやとくやれと

河　うつくみしぬしなき花庭にも桜花

今ははかりてそむかりきみれ

宮ふりみ見ぬ人へしなき花御かくれ

ん風とゝや風ゆすりあらん

花

あさひ京ぬしたゞにやその桜かれ

こゝ後やとゝや風よりあらん　恵堂

して葉下札朝よん風すくやなしわり

色花より寄あふに付つりぬしなれ

やとい宇治のふる家けりつゝ

寄

川あさひ京ぬしあれ宿し

宇治家の事所之風りあらぬ也

秘

葦宇治在旦の風り枝つり花色に

ひる通てられ流葦原の寄一周と

河あさひはつぬし　箕

うち流けふさゝりかとゝ物れられ

葉すことぬしたりえ尾ともてさせ

うるさもるさ

文の体とゆとより

寄　白文の事

白へ葦丸寄りのうえけおあり　三条

ふかへ葉いるさるさ次へ家ぬへし

ふくらに

秘
二条院之

箋
二条院の對よの句文也たりけす
あり也

まいりいれにきや

秘
こりくにあにくるやのん之
箋

何まとじちれるを

河
實也

葉北之實より中君御之ひうし給
こちれしる也

御車の御ゆりぞくして

箋
車輿とも也句文の条用あれ用意也

さらいてあひて

秘
中君乃御方へ葉れより御つ之

多いの流らる人

弄
中君れるる

中君御いうつ之

山あとれまてひれる人

箋
宇治山里也

ことハ乃すゑたけ　一

箋 女のこりもかれしてよりなるへ〔く〕よりなるへし

案内しかるへき之

もろ人しまれ

秘 宇治山にすみける人なるへし

拾 喜撰事伝未詳宇治にすみける人なりし人也

箋 あるにはよりたかれの出家之

拾 喜撰事伝未詳(?)りくにすみける人なりし

人也

我文字へてもあへ候はう

秘 喜撰の詠

箋 我庵ハ都の巽なりしあるり宇治なりといへ

かれしゆしなと之 孫(?)ちうれといふ

如也

なれくしれたるものや

箋 白文の随に中いらしとも也

世中をうりとかれ

箋 宇治のやまなれて縁句対両(?)しく

ことはいへり　一

おほいへの宿もすみあれて

弄
薫乃心も移ゑあてあまてとりふ
んあり

秘
中君は前より色々くちちかへは
しる也

箋
おに二条院の桜乃事ありてかく
なる宿はたまかなる事也大
君は事をあらそひいふ許也

うらおもはしくともおもはれぬに
薫はさ海之
けふおほえさせまするは

秘
中君乃心之

箋
大君はおほえさ海しかりしも也
薫はあらそのふさ海ゆく大君乃
事紙けりやし中君乃たとひあさ
れる也

かゝみに花の文鳥乃歌おもし

弄 中君の心よりかく姉君御とふらひ
いとかなしくまてかは此詞おもしろし
所にあり
秘 おなしと此詞の両義ありかく大君
をとふらひ給ふ也
くやしさこそ思へ御心よりはうきも
れ
秘 うき世にも出給ふ事なかりにつきては
一人思ひ出給ふ也

へくとも此御心に
箋 おなし人の心なるへし也 秘
いたはしきを
弄 中君の御方のいとかなしくおほえ給ふへく
こゝはさる也
私 中君の薫へ消息あるを御覧し給ふ歟
よ人にやさしくすゝむ事也
箋 しとこそは中君自分へ宮あり
給ふて人乃類ひもなき御事なと時ならと

いふ也云々
人はしなしれ
秘 中君のことハ匂宮ことハ匂宮の事之
匂宮ことハ匂宮の御ほとに
やすからすと之
中君薫へ此ありしらひ給ふことゝく
きこえそ給ハんとゝく
白文此条内あらんとゝく中君へハ
しか後ハいよ〳〵あやしき疑也

なとかむかしにさしもかはりてハ
秘 白文の紹案
案 薫かしこまりしもまへ紀伊守に乃
一 給ふ也
にあかりけるを
宇治文にて姫君ゑらひ人乃あり
る納也
あやしやとおもふ隔く
不審此事内和とさなつかしや也

わかきぬハなこゝろ浦なれ

義 昔葉とゝ中君とのあひゆかあり

深らんしる也

さハありとも阿まりんゆかひせんも

異 ゆかなハいしよ歌を

一うあれ

義 句のゝ多くにのこゝ深へきこ一うなふ

らんく哉りこうしる也

よの源氏にとあるを説なく

義 中君れん也

かのへとせひのかのうある庭に

秘 葉ゝ也

いふへれ源かゝりと

義 中君のんゝ之

葉ハ中君ハ大君乃名なりとせひ

中君と葉ハさやうにせんかあり

されともそれんりあうたなんこ

ゆへハ句文のまゝや々庭れらもそ

の給へハありかましき也
かきしるし侍るもの也ふかく秘し
ておかされ事なり
中院乃也之

昌平坂學問所

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan